

一まはりまはりておなし花の道
さす枝のさかりなりけり松のはな

風山

千歳の載せところなり恵方棚

朴齋

蓬萊やみな香のふかきもの斗ばかり

小錦

橙や若かへりてもおなしいろ
十かへりや千代を見初る花の色

清水

蓬萊や老のすがたのよき似合

遠勇

幹たけに枝葉のしける柳かな

包齋

よろこひのけふさきかけや福寿草

よし女

ことさらに鶴もやとりてまつる春

可笑

茂りあふ中のしけりや松の花

かね女

千代こめて色潤はしや松の花

可笑

十かへりの猶あらために若みどり

たか女

幾千代をかけて匂ふやうめの花

清山

申分なき咲やうそ福寿草

愛山

すこやかな声のひかりや百千とり

静雲

春なかの口ひらきなり初若菜

正祝

ふしことに千歳をこめてかさり竹

寛子

万世緑毛の号を得て海陸に

如雲

いさきよき寿の字や筆はしめ

一山

自在なる亀によせて櫻村可祝老の

還暦を祝す

千万の齢ひかさねん亀の春

壯山

常磐木につれて栄えん老の春

穩静

還暦を祝す詞書を略す

花やかな春とはなりぬかさり海老

仁山

福わらや直な手筋にもつ光り

うん女

むかしから詠れつゝきてはるの水

新之

月花にくりかへしてや初こよみ

はな女

蓬萊や家のしまりの居ところ

宝山

このうへも千歳をいのるはつ日かな

ひさ女

すこやかな顔のうつるやかゝみもち

あさ女

元日や仰けはたかき峰の松

つつ女

太はしや先いたゝきてもち直す

ゑい女

我実家櫻村氏は天正の頃より爰に継続
し実父可祝翁は常に親戚に睦に慈愛を
以せり今年還暦の賀筵を開かるゝを祝して

ちか女

おさな気の見えていさまし小松曳

ふみ女

里ふりてこゝに久しき家名喜かな

長俊

幾千代もかはりなき世の御慶かな

はつ女

父可祝翁は教て倦す慈善の志に富て

重忠

やり羽子やかさぬる数のいく千歳

つね女

ことし還暦の賀筵を開き給ふに

重忠

鶴に似し老の姿や今朝のはる

はる女

おたやかな老の波路やたから船

重忠

君か代をうたふてはつむ手まり哉

とよ女

父可祝翁は壯年より文武にこゝろさし
官に仕へて愛国の念厚く壮健にして今年

重功

嬉しさをそへて引たる小松かな

正生

還暦に値ひ其賀筵を開くに

重功

としよりの笑かほうれしや露の臺

倫三

一の矢のかまひいさまし弓はしめ

重功

福ひきや皆かよろこふものはかり

幸作

夫の還暦の賀に子孫等のつとひ来りて

重功

去年よりは引こゝろよき小松かな

本徳

ことほくことよろこほしさに

重功

花まてはきつとなるなり露の臺

本信

幾千代をともしなふ松のみとりかな

重功

際たちて色よき松やはつ日影

正吉

還暦自賀

重功

千歳のよろこひをひく小松かな

惠吉

朝ゆふのめくみや門の有米柳

可祝

すゝめさへ躍る軒端や千代の春

半蔵

妻

可祝

年よりも若うなりけりきそはしめ

半蔵

明治癸巳の春 応需 俳林書印

可祝

皆かみなわらふては引小まつかな

ミね女

可祝

老のため雪もいとほす摘わか菜

せつ女

可祝

ひこはへの枝もしけりてうめの花

みつ女

可祝

すこやかに千代も愛てなむ松囃子まっばやし

くま女

可祝

ぬく／＼と葉もかさねけり福寿草

くま女

可祝